

ベルと涎

洋戸蘭光

長老支配、神権政治、ファシズム、ナチズム、エトセトラといった、沼の底からとめどなく、ぼこりぼこりと、浮かび上がっては、途端弾けて、瞬間消える、刹那の生を受けた泡の様に、生死流転を繰り返してきた、多種多様な政治体制。しかし、深く深く、沼の底に眠る、堆積物の水溶性メタンが無くなれば、吹き出る泡もずっと止むように、世界も、長い戦争を経て、民主政治という一つの結論に、ふっと落ち着いた。そんな中、独裁と目される政治を、むしろ図々しいと思われる程に、周囲を顧みることなく、現在にわたって継続させている、そんな国家

は、すでに古今東西、その国しか残っていなかった。世界の足並みから外れた、独裁政治がもたらした輓轢などは、この場では割愛するが、重要な点はとどのつまり一つ、この独裁政治によって、国民は明らかに苦しんでいた、それだけだ。

そして、七月十七日、現地時間午後三時四十七分、〇〇邸宅前を通過した、独裁者を乗せたリムジンが、突如として爆発、炎に包まれた。周囲の護衛車両に乗車していた、第××軍部隊所属の警護兵が、即座に独裁者の救出にあたったが、轟々と燃え盛る炎に阻まれ、結局、独裁者の体を、黒焦げの死体を、

車の中から引きだしたのは、爆発が起きてから、一分三十〇二分後の事だった。

その日の夜、その国の空一面を、無辺際に覆ったのは、独裁者の怨念か、それとも、虐げられてきた民の歓喜の声か、いや雨雲だ。

その事件の翌日、また翌々日も、空は、重苦しい鉛色に染まった、雨雲を払う事も出来ず、町は、家も道路も、ベンチもネコも、そしてかの偉人の銅像も、悉く水浸し。ざあざあざあ、その音が三日続くだけで、それはもう、日常の要素の一つに溶け、雨が降っている事実を、ふと、忘却してしまいそうになるのも、致し方ない。だから、煙草を買いに出たその男が、玄関の扉を開け、そして外の現状を見るまで、傘を持ち出すことを、すっかり失念していたとしても、それは深刻な事ではないはずだ。しかし、男はその事実から、一昨日の出来事が、凍てつ

くような冷気を伴って、つつと、背中を這い上がって来る様な、そんな戦慄を感じずにはられず、逃げるように、傘を引つ掴んで、家を出た。

隣家の前を通ったところで、男は何かを踏みつけたことに気づき、足元へ視線を下すと、そこには、雨でぐずぐずと、惨めに、溶けたようになった、新聞が。その一面を飾るのは、もう一日が丸々経ったというのに、飽きることも知らず、独裁者の爆殺事件。今朝のテレビに映っていた、泣きながら独裁者の死について、報道を行うキャスターの姿を、男は鮮明に記憶していた。今日になっても、何故、爆発物を事前に発見できなかったのか、内部に犯行を手引きした者がいたのか、そもそも何者による犯行なのか、事件を紐解く糸口となる情報は一向に増えず、増えるのは自称“犯人”ばかり。そう、昨日からネット上には、事件がある種の神秘性を帯びていることも手伝い、まるで独裁者の死体から、わらわらと

蛆が湧き出る様に、自称“犯人”が次々と現れ、また、彼らに呼応する様に、独裁者の死を喜ぶ声が、続々と湧きあがった。

その様はまるで革命だった。

無意味な、本当に無意味な革命だ。

もし男が、この事件と全くの無関係であったならば、そんな自称“犯人”達の告白を、余興の一つとして、観戦していたに違いない。

だが、その男は真に“犯人”であった。

独裁者を殺した”張本人”であった。

爆弾を仕掛けた”当人”であった。

しかし同時に、男はただの一市民であり、政治結社、秘密結社に属しているわけでもなければ、軍関係者でもなく、ましてや、殺し屋でもない、単なる勤労者である。

そんな彼が、独裁者を殺す事になる、その経緯は、およそ一週間前に遡る。

一週間前、男は家の前から、何者かに突然連れ去られ、目隠しをされ、車に乗せられ、かと思えば、飛行機に乗せられ、その機内で、お前が独裁者を殺すのだと説明を受け、逃れるすべなく、成すすべなく、言われるがままに、独裁者の車に爆弾を仕掛けた。それから、連れ去られた手順を、逆再生する様な段取りで、その日の深夜には、自分の住む家の前へと、気が付けば、帰されていた。そして、翌朝のニュースで、独裁者の死を知った。

それだけである。それだけなのだ。

わけの分からぬままに始まり、

わけの分からぬままに終わった。

何故、独裁者を殺す人間として、この自分が選ばれたのか、男には未だ分からず、見当を付けてみれば、スケープゴート等の単語が、ちらりほらりとあがってくるが、どの可能性と照らし合わせても、やはり自分を犯人として使う、納得できる理由は見つ

からず。結局、男はその不合理な出来事を、人生にさらにある不条理、朝目覚めると虫になっていた男がいるのなら、朝目覚めると独裁者を殺していた男がいたとしても、それは何ら不思議なことではない、そのように考える事にした。

そうして、今に至る。

男は、馴染みの煙草屋への近道に、川沿いの遊歩道を歩くと、隣では、濁った川の水が渦巻く姿、まるで苦しみ悶え、それでも行進を止めぬ、亡者の群れの様。

そして男は、橋の下に差し掛かり、

そこで男が、発見したのは、

『俺が独裁者を殺した』

それは落書き、橋が作り出す影のせい、その文字の赤は、黒みを帯びて、一瞬血かと見間違えるが、よくよく見れば、それはペンキの赤。その証拠に、

どういう経緯か、そこには置き去りにされた、赤ペンキの入ったバケツが、ぽつり。

男は、独裁者殺しの”犯人”は、その場に立ち止り、落書きを眺め、続いて、落書きの”犯人”に対して、男が確かに抱いた感情、それは、羨望、であった。

すると男は突然、その落書きに飛びつき、がりがりと、その長く伸びた爪が、剥がれそうになる程に、がりがりと、コンクリートの壁ごと、がりがりと、それを引っ掻き始め、さらに独り言まで始めたので、それらの音は、ざあざあ、がりがり、ぶつぶつと、「譲るよ、譲るよ、譲ってやるよ”犯人”。そんなに独裁者が憎いんだったら、どうして、どうして、俺が殺す前に、お前があいつを殺してくれなかったんだ。俺はあの独裁者の事を、殺すほど憎んではいなかったのに。」

確かに男は平素、独裁者の事を、あんな悪党くたばってしまえ、そんな風に考えていた、しかし、独裁者を殺せ、そう言われたあの瞬間から、独裁者への憎しみは、男の胸から、メッキの様にぼろぼろ剥がれ、剥がれた末に何も残らず、つまりは、男の独裁者への感情、それら全て、メッキであった。

とうとう立つことも出来なくなり、壁に寄り掛かるように、その場に崩れ落ちて、それでも、落書きを引つ掻くことは止めない、その男の体は、震えていた。寒さのためではない、独裁者を殺した、罪悪感のためでもない、何故なら、男にとって、独裁者を殺した事、それ自体は、余りにも現実感を喪失した、白昼夢の様な出来事で、罪悪感そのものが、まだ、男の心に追いついていないからだ。

それでは、男の震えの根源、その正体は何か、それは即ち恐怖、自身の持つ”感情”に対する恐怖であった。自分が今まで、感情だと思っていたもの、

その全てが偽りであったと、否応なしに実感させられ、男は、心そのものに対する、強い懷疑を抱いていた。

自分が今まで感情だと思っていたものは、自分の思惟から形作られるのではなく、何らかの逃れえぬ法則に、自分でも気づかぬ内に、従っているだけではないのか。

それはまるで、パブロフの犬の様に、社会が凜とベルを鳴らせば、社会が独裁を不当だと言えば、社会が独裁者の死を誓むべき事だと言えば――俺は涎を垂らして、俺は独裁者を憎んで、俺は独裁者の死を喜ぶのだ。

自分は独裁者を殺した。

この国の人間はそれを喜んだ。

だが、その喜びも偽りなのだ。

独裁者に対して、

本当の怒りを、恨みを、憎しみを、

この国の人間が、抱けるはずがない。

所詮、隣の国の独裁者のことなど、

他人事だ。

そこで男は突然に、バケツの隣に打ち捨てられていた、刷毛を手に取り、再び落書きへと向かい合い、その文字を塗りつぶすように、新たに書きなぐった文字は、

『お前が独裁者を殺した』

そして、右手の刷毛を、バケツの中に放り投げ、しかし、ペンキに刷毛の飛び込む音は、雨音にかき消され。それでも、胸のすくような気持ち、男は少し期待して、しかし、元の文字と混ざり合って、もはや何を書いたか判別できない、その落書きをいくら眺めても、募るのは空しさばかり、仕舞には、ああ馬鹿なことをしたと、恥じ入るような心持になつて、逃げるように、傘も持たずに、その場を去つて行つた。

雨は未だ降りやまず、苦しむ者にも、悲しむ者にも、喜ぶ者にも、逃げる者にも、平等に降り注いでいる。